

私がオーボエを吹くようになってからは高校生活になってからです。中学生のときはクラリネットを吹いていたので、当然、高校の吹奏楽部でもクラリネットを続けるつもりでした。しかし、何故かクラリネットの希望者が多かったため、当時顧問だった富原先生の薦めでオーボエを吹くことになりました。「難しい楽器だから上手いヤツにしか吹けないぞ」って（笑）。

それでも3年生のとき、沖縄の高校生としては初めて九州大会（当時は西部大会）を通過して、全国の舞台に立ったわけです。自由曲はその頃の吹奏楽コンクールでスタンダードになりつつあったホルストの組曲「惑星」の木星で、エンディングに向かう細かい動きのソロをどきどきしながら吹いたのを良く覚えています。当時は意識していなかったのですが、いま思えば沖縄の代表として本土に赴くというのは貴重な体験で、それが今につながっていると思います。

高校卒業後は、プロのオーボエ奏者を目指して東京の音楽大学に進学、卒業後はドイツのプロオーケストラの一員として演奏活動を行ってきました。そのとき私につけられたあだ名が「ヨーゼフ」でした。トッププロの中で演奏するというのは非

常に刺激的でしたが、一方でなんとなくオーボエという楽器はもともと改善の余地があるんじゃないかと思うようになりました。音色にしても操作性にしても既存のオーボエは奏者の意見を十分取り上げられていない。高校生のときなら「楽器のせいにしてないでもっと練習しろ！」と怒られるところですが、この頃にはかなり確信に近いものがありました。それに、自分で演奏を聞かせられる相手は1回で2千人ぐらいいが限度。もし、自分の作った楽器が世界中で奏でられたら、もっとたくさんの人に自分が目指したオーボエの最高の音色を聴いてもらえるはずだ！と絶対の自信がありました。客観的に見て、楽器作ったことないくせに誇大妄想ですよ。ね。

そして、86年に帰国し東京でムジーク・ヨーゼフ社を創設しました。当時はバブル絶頂期で不動産が高騰していたのですが、どうにか東京郊外に小さなアトリエを構えることができました。まだこのころは楽器製造のノウハウはまったくありませんでした。演奏指導やリードといったアクセサリの販売でしのいでいました。90年にオーボエ職人ヘルムート・ハーガー氏を招聘しましてオーボエの作り方を教わ



Chūki no Me

Series 29

地域の目

最高の音色を沖縄から

株式会社 美ら音工房ヨーゼフ 代表取締役 仲村 幸夫



りました。そりゃ最初は断られましたよ。氏にしてみれば、「演奏のプロが片手間でオーボエ作れるか！それに職人始めるには遅すぎる年齢だ」とでも思ったのでしょう。ハーガー氏の厳しい指導もあって、大体4ヶ月程度ぐらしかけてオーボエ第一号を完成させました。知人のオーボエ奏者のクレメント氏に試奏してもらったことになりました。このとき、「素晴らしい音色だ！神様からオーボエ奏者への贈り物だ！」と大変喜んでくれて、自分のやってきたことが間違いじゃなかったと喜びもひとしおでした。

本数が少ないながらも欧州を中心に国内でも徐々に高い評価を得てヨーゼフのブランドを確立してきましたが、それでもどこかに満たされないものがありました。根無し草といいますか、縁もゆかりもない土地に自分のやりどころを感じませんでした。07年に東京から沖縄にアトリエを移したのは、故郷に何か貢献したいという「うちなーんちゅ」としてのアイデンティティーへの帰着でした。07年に沖縄に工場を

移転してオーボエの生産も安定し、新たにクラリネット、ピッコロといった新製品を開発・量産するに至りました。スタッフにずいぶん苦労を掛けましたが、東京時代からの社員と沖縄移転後に採用したメンバーが団結して素晴らしい製品を作ってくれています。彼らには、沖縄という小さな島にありながら世界最高峰の楽器を作っていることに自信を持つように言っています。

今年はこれまでの欧州、日本国内だけでなく、中国市場への参入も本格化します。私の高校生時代と比べて、通信や交通がすごく発達して世界は本当に小さくなりました。それでも当社が沖縄の企業であることを忘れることはありません。オーケストラでは多くの楽器が使用されますが、それぞれの個性を出すことで全体の調和がとれています。世界市場というオーケストラの中で「うちなーんちゅ」が奏でるべき役割があることを社内、社外に向かってこれからも発信し続けていきたいと思っています。